

## 箴言25章2章 「事を隠す神」

### 1A 事を探る王

1B 神からの知恵と知識

2B キリストに対する祭司と王

### 2A 事を隠される神

1B 人知を超えたご計画

2B 愛される方

1C 神に隠すことの愚かさ

2C 言い表す者への贖罪

## 本文

私たちの教会は、聖書通読によって礼拝を守っていますが、箴言 23 章まで来ました。本日は午後礼拝で 24 章から 27 章まで読みたいと思っていますが、今朝は 25 章 2 節に注目したいと思っています。「**事を隠すのは神の誉れ。事を探るのは王の誉れ。**」神にも、王にも誉れがありますが、それぞれ対照的なところで誉れを持っています。王は事を探るところにその名誉がありますが、神は事を隠すところに誉れがあるというのです。

### 1A 事を探る王

25 章 1 節を見ますと、「次もまたソロモンの箴言であり、ユダの王ヒゼキヤの人々が書き写したものである。」とあります。ソロモンが箴言、格言を書き記していましたが、二百年以上もの後に、ヒゼキヤが書記官らに、ソロモンが書き記したものを編集するように命じたものと考えられます。ヒゼキヤは主の目にかなった王でしたが、王として知っておくべきことを並べています。

### 1B 神からの知恵と知識

王が事を探ることが誉れというのは、王は当時、最高裁判所のような役割を担っていたからです。ダビデ王の時に、息子アブシャロムが王のところに来て訴えようとしている者に話しかけていたと書いてあります(2サムエル 15:2)。それはアブシャロムが人々の心を自分に引き寄せて、クーデターを自論んでいたからですが、民は王のところに訴えを持ってきていました。王が最終的判断を下していました。

そこで王は、事を探る務めを持っています。その事件について、詳細に調べて、一つの判断を下さなければいけません。そこには公正と義という物差し、そして深い洞察力が求められます。それを求めたのがソロモンでした。彼は若き時に王となり、主に何を与えようかと尋ねられ、それで「善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。(1列王 3:9)」と祈りました。その代表的な出来事が、二人の遊女が彼のところにやって来たことです。二人が同じところで赤ん坊を産みました。ところが、夜の間に、一人が自分の赤ん坊を寝ている間にその子の上に伏してしま

っていたので、死んでしまいました。けれども彼女は、その死んだ子をもう一人の女の赤ん坊と夜、寝ている間に摩り替えたのです。

けれども、その女は、「いいえ生きているが私の子で、死んでいるのはあなたの子です。」と言い張りました。それで二人は王の前で言い合いになりました。第三の目撃者、証人は他にはおらず、ソロモンは二人の対立する主張を聞くだけしかできませんでした。そこで彼は宣言しました。「生きている子どもを二つに断ち切り、半分をこちらに、半分をそちらに与えなさい。(3:25)」すると、一人の女は「どうか、その生きている子をあの女にあげてください。」と頼みました。そしてもう一人は、「私のものにも、彼女のものにもしないで、断ち切ってください。」と言いました。それで、王は、「生きている子どもを初めの女に与えなさい。決してその子を殺してはならない。彼女がその子の母親なのだ。(27節)」事を探るのは王の誉れ、であります。彼は、母性本能を使って心の隠れている部分を引き出すことができたのです。

## 2B キリストに対する祭司と王

ところでイエス様は、悪霊を追い出して戻ってきた弟子たちがのことで、喜びにあふれ、父なる神に賛美しました。「ルカ 10:21 天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのこと、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。」主は御霊によって、これらことを示してくださいます。王が事を探るのが誉れであるように、私たちキリスト者は御霊によって神に知らされることを大切に保ち、その知恵によって、自分自身を、そして周りの人々を、神が支配されるように治めていきます。後に来る世では、キリストにあって私たちは王であり祭司となるのです(黙示 1:5-6)。

ですから私たちは、この地上にいる時に、神の国を相続するための訓練を受けています。「ヘブル 5:14 しかし、堅い食物はおとの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。」御霊によって、御言葉に悟りが与えられ、それを積極的に今、自分が置かれている所で当てはめていき、善悪を見分ける判断を下していきます。聞くだけでなく、実行する者になることによって、神の真理を経験してそれを身に付けることができます。

## 2A 事を隠される神

### 1B 人知を超えたご計画

このように王は、事を探るのが誉れです。けれども、神は事を隠すのが誉れなのです。なぜでしょうか？それは、神ご自身は何も探ることのできない方だからです。神は全てを予め知っておられます。そして初めに天と地を、ご自分の知恵によって造られました。そして初めに、終わりまでのご計画を立ておられます。その御旨はあまりにも深く、探りようがありません。「ローマ 1:33 ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」

ですから、主はどのようにして、ご自分の事を知らせるのか、それを、思慮をもって知らせることに

知恵を用いておられます(エペソ 1:8-9)。主はご自身のことを明かすのですが、全てを明かすのではありません。ご自分の民に、その民の益になるために思慮深く、その明かすものを選ばれるのです。それはあたかも、サプライズの誕生祝いのようです。その人を豊かに祝福したいと願っているからこそ、あらゆる準備を用意周到に行ない、けれども隠れて本人には気づかないようにするのです。神は、ご自分の愛されたものに、驚くべき祝福を用意してくださっています。

しかし、知らされていない者にとっては、時に辛い作業です。自分の身に何が起こっているのか、その全貌を把握できないので悩むのです。27章1節には、「あすのことは誇るな。一日のうちに何が起こるか、あなたは知らないからだ。」とあります。明日のことさえ、不確定な状況の中に私たちは置かれています。しかし、それは幸いをもたらします。まず、その中で信仰と忍耐を働かせることができます。その状況は把握できない、何でそんなことが起こっているのか分からぬ。しかし、主に信頼してみようという決断ができます。神が何でこんなことをしているのか、分かりません。主がそれを隠しておられます。しかし、知らされていることはあります。主が明日も共におられることです。主は見捨てておられず、明日は主が掌握しておられるという事実、それは知っています。

知らされていないことによって、むしろ主ご自身と、その御言葉に拠り頼むようになります。モーセを通して主がイスラエルの民に言われました。「申命 29:29 隠されていることは、私たちの神、主のものである。しかし、現わされたことは、永遠に、私たちと私たちの子孫のものであり、私たちがこのみおしえのすべてのことばを行なうためである。」御言葉をただ聞くだけでなく、それを実践しようとします。そうすることによって、そこには自分ではなくて、神中心の世界が自分の周りで広がります。自分が自分の計画を掌握するのではなく、神がご自分の計画を私たちの内で実行してくださるのです。

ヨセフのことを思い出します。彼は、父ヤコブの亡き後、兄たちにこう言いました。「創世 50:20 あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。」兄たちがヨセフを奴隸に売った時に、神は事を秘めておられました。そして、彼がポティファルによって牢屋に入れられた時、神は事を隠しておられました。さらに、二年後にパロの前に出て夢を解き明かし、それでエジプトの総理大臣になりました。しかし、神はそれでもまだ事を秘めておられました。世界に飢饉を引き起こして、それでヤコブの家族を救う計画を立てておられました。そして、それは同胞ユダヤ人を、神の救いの計画の中で執り成すイエス様を示すために、ヨセフが神の救いのご計画を知って、兄たちを赦す、その神の御心に沿つて生きるためでした。

明日のことは分からぬ、自分で自分の人生を掌握できない、これはもどかしく辛いことですが、神を愛している者であれば、確実に自分の内に、ヨセフと同じようにキリストが形作られています。北朝鮮による拉致被害者横田めぐみさんの母、横田早紀江さんの証しは人の心を打ちます。彼女はこう言いました。「人知の及ばないところにある神の存在は、この世の悲しみ、苦しみ、すべてのことを呑み込んでおられるのだ。私の悲しい人生も、人間という小さな者には介入できない問題なのだ。聖書はそう語りかけてくるようでした。」

## 2B 愛される方

そして神は、もう一つ隠すことによって、ご自分の誉れを現す行為があります。ダビデが、罪を犯してそれを告白した後で、こう言いました。「詩篇 32:1-2 幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。」ダビデに対して、主はその罪を覆ってくださいました。それは隠すと言ってもよいでしょう。罪を赦すことは、その罪を覆うことです。罪を取り上げないことです。

箴言 10 章 12 節に、「愛はすべてのそむきの罪をおおう。」とあります。使徒ペテロも、第一の手紙でここを引用して、互いに愛し合いなさいと命じました。背きの罪を覆うことは不正ではないのか?と思われるかもしれません。今からダビデの通ったところを見ていきますが、確かに罪を隠していくは罪の赦しも得られません。しかし、罪をことさらに取り上げることによって、何が起こるかと言いますと、分かり易い言葉を使うなら「スキャンダル」になります。その人の不正や不品行、その人自身に注目が寄せられるようになり、自分自身が神と神の命じられていることから目を離し、それを行なわないでいる結果に陥るのです。

そして罪を取り上げることによって、人々の間に亀裂を生じさせます。「箴言 17:9 そむきの罪をおおう者は、愛を追い求める者。同じことを繰り返して言う者は、親しい友を離れさせる。」繰り返して言わない、むしろ覆うのです。そこに愛の結びつきが生まれ、平和の結び目ができるのです。そして、そこに神の栄光が現われます。人に注意が引き寄せられることはありません。

何度も箴言の学びでもお話ししてきましたが、正しくあろうとすることは実は神の御心を損なうことが多いです。神は人が罪深いものであり、罪を犯さない者はいないということを知った上で、なおのこと関わっておられるのです。ですから、聖書は初めから終わりまで、徹頭徹尾、徹底的に、神のみが正しいことを証言しています。どんなにすぐれた指導者であっても、ノアがそうでした、アブラハムがそうでした、モーセがそうでした、ダビデがそうでした、そして十二使徒がそうでした。みな、どこかで失敗しています。弱さを身にまとった者たちであったのです。

しかし、神はその不思議な計らいの中で、こうした者たちを用いてご自分の栄光を現されます。ご計画を実行されます。その人が優れているから神に用いられているのではなく、その不完全な姿にも関わらず用いられるのです。それは、神の恵みの栄光が現われるためなのです。神の主権が現われるためです。このことを知らないで、表面的な正しさだけを求めるならば、そこは人間主義の活動の場にはなりこそすれ、神の働く現場とはならないでしょう。

## 1C 神に隠すことの愚かさ

ダビデは、主に背きの罪を覆われるに当たって、彼自身が主に対して自分の罪を隠そうとしていた時、悶え苦しんでいました。「詩篇 32:3-4 私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髄は、夏のひでりでかわききったからです。セラ」私たちは絶えず、自分を守ろうとしています。自分の手で自分の命を守ろう

としています。そこで罪を犯しているということ、犯したということ、それらを自分の中で隠そうとします。神に覆っていただくのではなく、自分で覆おうとするのです。

ダビデは、バテ・シェバと姦淫の罪を犯しました。それだけを隠していればよいだろうと思っていました。ところが、彼女が身ごもったのです。その時点で隠せないことを悟ればよかったのですが、彼は、夫のウリヤが彼女のところに入って、その二人の間の子であるように見せかけようとした。隠そうとすればするほど、事態は大きくなっています。ウリヤは、アモン人のラバにある城を攻略しようとしているヨアブの下で戦っていました。そこから呼び戻されてダビデが食事の席に招いたのです。そして妻のところに戻りなさいと言いました。ところがウリヤは王宮の門の辺りで、家来たちといっしょに寝たのです。それでダビデは、「なぜ妻のところに行かなかったのか？」と問い合わせると、「私の主人ヨアブも、私の主人の家来たちも戦場で野営しています。それなのに、私だけが家に帰り、飲み食いして、妻と寝ることができましようか。(2サムエル 11:11)」と答えます。

そこでダビデは、ウリヤをアモン人との戦いの最前線に送り込むように仕向けています。ウリヤは戦死しました。それでバテ・シェバはやもめとなります。しかし王が彼女を自分の妻に召し入れました。これは当時としては、王が家来の妻、死んだ家来の妻を自分の妻とすることということは、家来を思っていることとおして名誉なことでした。ですから、ダビデはここでも自分の罪を隠せると思っていたのです。しかし、その間、先に読んだ、内なる人が苦しんでいる状態になったのです。自分の体も疲れ果ててしまいました。神の御手が重くのしかかっているのを感じました。そして、夏の日曜日のように骨髄が乾ききったと言っています。自分の罪を自分の中で覆い隠そうとしているので、その罪が自分から命を吸い取り、神との仕切りを作っていたのです。

けれども友人であり、預言者であるナタンが主にダビデがしたことを示されました。ナタンは、そのままその罪を責めるのではなく、譬えを使いました。彼自身が、自分の罪に自ずと気づくようになるためです。雌羊を飼っている一人の貧しい男の話です。とてもその羊を可愛がっていました。そして多くの羊を飼っている、富んでいる人がいました。その家に旅人が来ました。もてなすために、なんとその貧しい人のたった一匹の雌羊をほふって、それを旅人に与えたのです。その話を聞いてダビデは、「その男は死刑だ。」と叫びました。そしてナタンが言ったのです。「あなたがその男です。」その富んだ人とはダビデのことでした。彼には多くの妻がいました。けれども、ウリヤにとてバテ・シェバはたった一人の妻です。彼女を奪い取った罪を明らかにしました。

けれどもダビデは、罪を言い表したのです。「私は主に対して罪を犯した。(2サムエル 12:13)」するとナタンも、「主もまた、あなたの罪を見過ごしてくださった。あなたは死なない。」と宣言したのです。そこでダビデが言いました。「詩篇 32:5 私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。セラ」咎めが赦されました。主がその罪を覆ってくださり、隠してくださり、引き離してくださったのです。

## 2C 言い表す者への贖罪

主が、ご自分の中で罪人を赦すとお決めになっているのです。キリストを遣わした時点で、いや、永遠の視点から見れば、初めから、人の罪は大目に見て赦すことを決めておられました。しかし、問題は、その負い目を自分の懷にしまい込んでしまうことです。自分で自分を守ろうとして、自分の心にある罪を神に言い表していないのです。罪とは結局は、神がそれを受けとめてくださる、神が覆ってくださるという約束を信じられていないこと、神の慈しみを信じていないという、不信頼なのです。

神は罪を隠すことによって、ご自分の栄誉を得ようとされます。しかし、そのためには神に明け渡す必要があります。イエス様が復活された後に弟子たちに言われました。「ルカ 24:46-47 キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」罪の赦しを得させるために、第一にしなければいけないことは、悔い改めです。悔い改めない者は、罪が赦されません。

悔い改めとは何か?「思いを変える」ことです。これまで自分が人生の主導権を握っていた。自分に力がある、自分の人生を動かす知恵がある、そして自分に義があると信じて行なっていました。それをすべて、神に明け渡す作業です。表面的な過ちの後悔ではありません。「私はこんな悪いことをしました。」と言うのですが、同じことを繰り返しています。同じことをしているので、過ちを指摘すると、「もう悔い改めたのに、なぜ同じことを言うのですか?」と聞きます。なぜなら、悔い改めていないからです。同じことを繰り返しているからです。そうではなく、自分の生活に自分を中心に据えていたという偶像を取り除き、主に主導権を握っていただき、主のみに仕えることです。

次に、今、ダビデの話で見てきたように、罪を言い表すことです。隠すのではなく、そのまま神に打ち明けます。「1ヨハネ 1:9 もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」ですから、悔い改めることは第一点。第二点は、罪を言い表すことです。そして第三点は、「主を信じる」ことです。主イエスを信じれば、自分もその家族も救われると、使徒パウロはピリピの牢獄の看守に対して言いました。自分の罪のために、キリストがその罪を負ってくださいました。そしてキリストが死者の中から甦られた。このことを自分のこととして受け入れることです。この三つを経て、罪が赦されます。悔い改め、罪を言い表し、神に立ち返ります。

そして主は罪を覆ってくださいます。赦してください、思い出さないようにしてくださいます。「詩篇 103:12 東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。」主は罪を覆うことに誓れを抱かれています。ご自分の計画を隠すところで誓れがありますが、罪を赦すというところに、神の不思議と知恵があるのです。